

大西洋の落日印象記

(1969年10月の「ルック五大陸8万キロ」旅行のときのアフリカでの体験)

アフリカの西海岸にコートジュボアールとセネガルという国がある。前者の英語名がアイボリーコーストと呼ばれ、文字通り象牙の沢山穫れた国で、1970年の大阪万博に参加しているのをご存じの方も多いだろう。後者は、かつて欧洲、アフリカ、米大陸間の製品・奴隸・原料の三角貿易の奴隸買いで有名なゴレ島をもつ、暗い過去がある。

いずれもそれぞれ1960年、1959年に独立して日の浅い新興国である。

両国とも、観光をした限りではそれほど魅力のあるものはない。眞のアフリカらしさは彼らの生活である。象牙海岸の首都アビジャン（注・現在の首都はヤムスクロに移されている）でのマーケット風景、川原で見た隣国の出稼ぎ洗濯夫の労働、同様に、セネガルの首都ダカールでのマーケット、日本と異なった主婦の子供の背負い方、勉強不足であったが、思いも掛けぬ回教寺院などに興味を覚えた。

哀れを止めたのは。土産店の押し売りであろう。その執拗さは料理にたかった蠅の如きで、東南アジアと同様、後進国の一悲しさである。それは、本来のアフリカ人の性質ではないと思うのだが、過去の搾取された民族の貧しさが、識らず識らずのうちに顧客から奪うような稼ぐ智慧を植えつけてしまったものだとは言えないだろうか。もっとも、1、2日の短い滞在での皮相な観察で断言するのは危険であるのだが、先進国の横暴さの反動のような気がするのだが。

さて、この地の観光の醍醐味は狩猟であろう。東海岸の草原、サファリのような壮大さはないが、密林を分け入っていく類のものようだ。しかし、一週間程度のツアーでは、金銭面からみても、まだまだ日本人向きではない。

パリダカで有名になったパリ＝ダカール・ラリーも私がダカールを訪れた十年後に初めて開催されたことでもあるし、私が訪れた1969年は、まだ、エジプト観光や、ケニヤやタンザニアの草原を車で走るサファリツアーやも含めて、アフリカだけを訪ねるツアーハ一本も企画されることにない時代であり、ヨーロッパ旅行の日程の一部にエジプト旅行を加えたツアーガあったかなかったかの時代である。

それでも、この地に、脱日本人臭さを百パーセント求め（恐らく我々が日本人初の観光団だったと思われるのだが）たが、近くには、日本漁船の多いラスパルマス島があり、現地人の着ているものの中に、メイド・イン・ジャパンが多いだろうということを考えると、観音様から脱しきれない孫悟空のように気持ちであった。アビジャンにはホンダの工場があったくらいであるから。